

2000・下水文化研究フォーラム “これからの人と水とのかかわり”

講演(1)・河川文化の継承と発展のために

芝浦工業大学工学部土木工学科 守田 優

ただ今、ご紹介にあずかりました芝浦工業大学の

守田です。今回、こういうシンポジウムで、お話を

させていただく機会を与えられたことをうれしく思
っております。ご紹介にありましたように、専門は、

都市の水文学ということで、地下水の問題とか、洪

水の流れの問題とか、浸水被害とか、どちらかとい
えば、コンピュータを使って解析の計算するような

ことをやってきているのですが、環境問題全般に対
して、私自身個人的に関心がありまして、いろいろ
な人とディスカッションしたりしております。

あと、『河川文化』という雑誌が、平成10年から
刊行になりました。そのときに編集に加わらないか
ということ、それからずっと編集の仕事の一部や

っております

ます。そういう関係で、河川文化に関して、環境の
ことも含めまして、話をさせていただきたいと思
います。

河川文化とはなにか

まず、河川文化とは何かということです。文化と
いうことが、河川の議論の舞台に上ってきたのは、
この数年なんです。そのときに、河川文化とは何か
ということについて、『河川文化』の雑誌を出すとき
に、かなりディスカッションしました。そもそも文
化とは何かというと、非常に広がりがあります。

例えば、文化勲章というときの文化というのは、

学問・芸術という、われわれの暮らしより次元の高い、そういう世界に文化という言葉を使います。中国で文化大革命というのがありました。あのときの文化というのは、いわゆるマルキシズムですね。経済が下部構造で、上部構造の方に政治とか教育とかがありますけれども、経済の革命が終わったら、今度は上部構造の政治が変わって、さらに文化まで変えないとシステムとしては完結しない。そういう文化のイメージというのがあります。また三島由紀夫の「文化防衛論」っていうのがありますけども、その文化は日本人の精神の支柱と言いますか、そういう綿々と続く日本人の精神みたいな、そういうものを指しています。それから、先ほど萩原先生の話で、ちらつと出ましたけども、ホイジンガという哲学者が言っておりました「遊び」としての文化、文化は遊びであるというふうなニュアンスですね。また、今は言いませんけども、かつて「文化住宅」というものがありました。このときの文化というのは、生

活のレベルが高いといったニュアンスでしょうか。

このように文化といったとき、いろんな使われ方がされます。最後に、文化人類学という学問があります。文化人類学では、この場合の文化というのは、人間の生活行動様式みたいなものです。そういうものを文化ととらえています。よく、言葉の定義などで広辞苑が使われますが、広辞苑を調べても、なかなかぴたりするものがなかったんですね。私が愛用しております辞典では、「社会によって作り出され、受け継がれている固有の思考、行動、生活様式」という定義がありまして、やや文化人類学に近いニュアンスでしょうか。河川文化というときの文化は基本的にはこのような意味にかなり近いんじゃないかというふうに考えております。

さて、その河川文化ですが、この場合の文化は、いま申しましたように生活ということがキーワードとしてあります。われわれの生活と川がどうかかわっているか、といった観点から文化をとらえる。つ

まり、われわれの生活と川のかかわり。そういうかたちで河川文化というものを考える。雑誌『河川文化』の創刊のとき、そんな基本認識があったように思います。そんな中で、例えば、川が市民の生活を流れる。そうなればいいなという話があったわけです。

例えば、私たちの町はこういう町です、と人に話をするときに、そこに川が入っているかどうか、非常に大事なポイントだと思えます。つまり、私の住んでいるところはこんなところですよと言うときに、そこに身近な川や水辺が入っているか、意識の中に入っているかということは、河川文化という意味では非常に大きなことであって、やはり大きな川があっても、水がきれいであっても、そこに住んでいる人の意識や生活の中に川が存在しなければ河川文化はないのです。

以上、河川文化の文化という言葉について話してきましたけれども、ここで河川文化のイメージにつ

いて整理してみますと、だいたい三つぐらいのところがあります。まず、日常性というか、日々の暮らしの中の川との関係、例えば、水遊びしたり、魚捕りをしたり、あるいは川のもとを散歩するか、そういうことでの関わりが日常性としての河川文化です。次に、非日常性ということでは、例えばお祭りですね。あるいはイベントとかです。山形では、芋煮会といって、馬見ヶ崎川の河川敷で芋を煮て皆で食べる。そういうイベントが年に一回あります。あるいは、埼玉県のあるところでは江戸時代から続いたこ揚げの大会とかがあります。そういう、日常的な暮らしとは違うところでのイベント、そういう河川文化のとらえ方もあります。

それから、三番目は、一番多いですけども、いわゆる歴史的に受け継がれてシンボル化した、あるいは形象化したもの。これは精霊流しとか、鵜飼とか、あるいは金沢の有名な加賀友禅とか、そういう昔からやられているものが伝わってきている、そ

うものを河川文化というとならえ方があります。

河川文化認識への経緯

河川文化というものがどのようにして認識されるようになったのか。つぎにそのあたりを述べたいと思います。河川には、治水、利水があり、それに親水ということが加わってきました。親水は、最近では、環境と言われていますけれども、ここ数年の、河川文化というとならえ方は、治水、利水、親水とは違う、新しいとならえ方なのですね。このことを若干述べておきたいと思います。

あるNHKのシンポジウムで、竹村さんという河川局長さんが、住民参加に関して、治水とか利水というのはわれわれの仕事なんだ、しかし環境については住民の参加というのを期待している、ということと話されたのです。実はそうじゃなくて、治水に対して住民の立場からは水防というものがある。つまり暮らしの中での水害に対する対処法、例えば川

の水かさが増したら家具をどうしようとか畳はどうしようとか、生活の中にそういう水害への対処というのが実は入っていた。それから利水だって、川の水を利用して洗濯したりとかもあるわけで、決して治水・利水はすべてお上の仕事だけで片づくわけではない。それをいわば取りあげてきた。つまり治水はおれの仕事だと取りあげてきた過程が、住民の川離れを助長してきた面は確かにあるわけです。

親水については、あとから問題点を話しますが、ここで河川文化ということ論じるのは、治水、利水、親水という、そういうことをトータルとしても一回見直す、つまり生活から見直す、そういう視点があるわけでありまして、これが、この数年出てきました河川文化の視点であると考えております。

〈河川と人の生活との一次的関係〉

ここで河川文化という認識に行くまでの経緯を歴史的に簡単に整理してみます。まず、よく出てくる

のは、雑誌『河川文化』の中で会員の声などを読みますと、だいたい中年から高年の方が、昔は水がきれいだった、川でよく遊んだという話があつて、今は水は汚いしひどいというような話が出てきます。つまりノスタルジックな思いをされているわけです。つまり60年代以前のかかわりというのは、農業とか漁業とか、あるいは日常の炊事とか洗濯とか、あるいは魚捕りとか、そういう身近なところで川を感じていて、川の変化も身近に分かつたわけです。漁師だと、魚が最近捕れなくなる、どうも川が悪くなつたとか、日々感じるわけですね。その関係というのは、いわば人と河川との一次的関係ということができまして、川があつても身近すぎて、存在の価値が分からない。それだけ生活の中に入っている関係というのがやはりあつたわけです。この60年代以前の人と河川の関わりは、まず、一次的な関係ということができません。

〈高度経済成長期の河川の近代化と河川の変貌〉

それが高度成長期、河川の近代化が進んできて、そういう関係が崩壊するわけです。一つには河川事業で、いわゆる三面張りの川が出てきます。それから当然、水質の悪化だとか、湧水が枯れるとか、あるいは河川での船の利用が減るとか、そういう変化が出てきます。そういうかたちで、川の基礎条件、環境の基礎条件と言つてよいと思いますけど、水量・水質・生物という川の自然性が崩れていったということですから。そういう川の環境の基礎条件が崩壊していく過程というのは、われわれの生活が物質的に豊かになつていく過程でもあるわけです。身近な自然が崩壊していく一方、われわれの家の中には、テレビが出てくるとか、冷蔵庫が出てくるとか、だんだん生活のレベルも上がってくるわけです。われわれ、ちよつと浮気しちゃつて、そういうものを中心に奪われちゃつたわけですね。そういうかたちで、川をはじめとした自然環境がだんだんだんだん崩壊

していったわけです。

ところで、常に言えることなのですけれども、人間と自然の関係と、人間と人間の関係というのは、パラレルなのですね。つまり、自然が崩壊し、それまでの自然と人間の関係が崩れていくことは、同時に、われわれの人間関係そのものが崩れていくことになるわけです。アトマイゼーションって言えるのでしょうか、いわゆる都市型の人間関係、隣の人が何をしている人か知らない。そういう関係まで住民の原子化が進んでいく。こういうかたちで、高度成長期、川と人との一時的関係が崩壊し、さらに疎外されていく。そういう過程が進行したわけです。

さて、70年代に入ってきますと、河川の水質の悪化はさらに進行し、公害問題が激化してきます。ご存知の70年の公害国会以降、国をあげての公害への取り組みが始まりますが、一九七七年、OECDの報告書が出まして、その中で日本の環境政策について評価しております。つまり、日本は高度成長期に

公害問題を激化させたけれども、その後の取り組みにより多くの問題を解決へと導き、勝利をおさめたということが書いてあるわけです。ところが、同時にそこで言われていることは、日本は公害問題を一応解決したけれども、環境の質を高めるということでは多くの課題を残しているということです。日本人はウサギ小屋に住んでいるなどと言われたのもそのことです。

〈余暇・アメニティーによる環境意識の変化〉

ところで70年代の後半に、日本はGNPで西ドイツとイギリスを抜いて、世界第二位の経済大国になります。80年代にはいりますと、経済的に豊かになったという実感が国民の間に広がってきます。お金持ちになった分だけ、もっと快適でリッチな環境が欲しい。向上した生活のレベル、質の高い環境への欲求、そういうものが合わさった形で、アメニティーとか、余暇とか、そういうことが、環境問題に入っ

てきます。つまり、快適さ、アメニティということ
が環境の重要な要素として認識されてきたわけです。
その中で、特に80年代以降、川の親水機能とい
うのが出てきます。つまり、治水、利水という問題
はすでにありますけれども、親水という言葉が、そ
こで出てくるんです。親水という言葉は、すでに、い
ろいろなところで語られて、広辞苑にも載っていま
すけど、このころから知られるようになったわけ
です。そこで、この場を借りて、親水の話をちよつと
させていただきます。

〈親水という言葉について〉

親水という言葉はだれがつくったか。だれがつく
って、どうやって広がっていったか。その辺の話を
裏話なんですけれども、なかなか一般に知られてい
ないものですから、話をしたいと思います。実は、
親水という言葉は、当時、東京都の河川部に勤めて
いた、山本弥四郎というひとがつくったんです。山

本さんというのは、私の知り合いなんですけども、
出身は京都です。京大を出まして、どういわけか、
東京都庁に入ったんですね。東京都で川の仕事をし
ていると、どうも東京の川、おかしいのではないか、
何か足りないのではないかということを感じたわけ
です。

そこで、山本さんは、川の機能というのは、治水、
利水だけではなくて、もう一つあるんじゃないかと。
つまり、河川の第三機能というものを考えたわけ
です。川には人間とのふれあいを通して心の潤いを感じ
させる機能がある。都市における川の存在は、自
然のひとつの表れであり、自然としての親しみを感
じさせる機能がある。山本さんは、この第三機能と
いうものを唱えて、土木学会に発表したわけです。
彼の話によると、会場には河川関係のお偉方がたく
さんいた。しかし、第三機能とか言ったら笑われて、
あまり相手にされなかつたらしいです。そこで山本
さんは、第三機能という言葉はどうも語感が堅くて

あまり良くない。もつといい言葉はないかということで、いろいろ考えたわけです。それで、いろんな本を読んで、ぶち当たったのが、親水コロイドという言葉なんです。親水コロイドという言葉に見立てて、親水という言葉が出てくるんです。治水、利水があつて、親水。いいじゃないかっていうことで、それで山本さんは親水という言葉を使うようになったわけです。親水という言葉を使い始めると、だんだん言葉が一人歩きしまして、いつのまにか考えた本人を離れて、だれも知らないところで親水というのが使われるようになったのです。

親水という言葉について話をさせていただきましたが、そういう親水という言葉が、前面に出てきて、そこで景観とか、アメニティとか、そういう観点から川を見ていくのが、80年代です。そして、経済的な豊かさを背景に、贅沢とも思えるような親水型護岸やテラス護岸など、河川が親水という観点から整備されていったのが80年代であるわけです。70年

代に指摘された環境の向上ということが、グロテスクなかたちで出てきたといったら言い過ぎかもしれませんが、親水ということが従来の構造物主義の延長線で現実化したと言えると思います。

〈住民参加の新たな段階とパートナーシップ　そして河川文化〉

その後、ご存じのように、バブルが崩壊します。そして90年代になりますと、日本人の生活意識もだいぶ変わってしまいました。高いお金を使って親水型護岸をつくる、そういうことに関して、もうものづくりはうんざりだという、そういう感じに変わってくるんですね。バブルが崩壊しまして、生活に関する考え方もだいぶ変わってきます。『清貧の思想』というような本が売れるんですね。もつと言うとあまり金を使わずに、余暇をどう使うかとか、ゆとりのある生活をどうしたらもてるかとか、そういう方向へだんだん向いていきます。そういう中から、自

分たちの周りの環境をもっと見直して、自ら参加しながら望ましい川の環境をつくっていくとういう、いわゆる川づくり、そういう運動がだんだん起こってきます。

そしてここへ来て、最初にお話しました河川文化、河川と人の生活の関わり、河川の文化的側面というものがいよいよ前面に出てくるわけですね。ここで人と川の関わりは、意識的、持続的な関係です。60年代以前の一次的な関係が崩壊し、人と川の疎外された関係を経たあと、再び川との間に新たな関係をつくっていく。それは、川があるのが当たり前というすでに失われた一次の関係ではなくて、いわばわれわれが意識的に、日々、川との関係をつくっていく、持続的な関係をつくっていく。例えばが悪いですが、夫婦生活みたいなもので、毎日、顔を合わせながら、日常的に関係を維持していく、そういうふうに変わってきたわけです。

ここで、ひとつのデータとして、今、川づくりと

言いましたけれども、いわゆる水と川に関する活動団体のデータがあります。何々川の自然を守る会とかありますね。そういう活動団体の実態を、河川協会がアンケート調査をしました。四〇〇〇通送って、二〇〇〇通あまり返ってきました。つまり二〇〇〇

を越えるぐらい、日本には川づくりの団体があるということなんです。そのような団体がいつころできたかといいますと、だいたい80年代後半から、90年代以降です。特にバブル崩壊後の90年代以降に多くの団体ができています。ここでいう活動団体は、70年代の住民運動とは明らかに異なっています。70年代の住民運動は行政と対立するかたちだったんですけど、そういう時代は過ぎまして、現在はパートナーシップということで、行政と一緒に川づくりを進めるといふ、そういうかたちになっています。そういう活動が、90年代になって、盛んになってきたということでもあります。河川文化はこのようにしてはつきりしたかたちをとってきたわけです。

都市のなかの川

治水・利水、それから親水を経て、川づくり・河川文化へというように河川文化認識への経緯をたどってきたけれども、あらためて、川っていったい何だろう、特に都市の中の川ってどんな意味があるのだろうかということを考えてみます。そこで、川って何ですかというアンケートをとりますと、だいたい二つのことに集約されるようです。一つは都市に残っている自然らしきもの。らしきってというのは、30年前なら、自然そのものを感じさせるものを持っていたかもしれませんが、現在の都市の川は、自然らしきものですね。少なくとも、川の流れていっているのは、自然にある方向に流れるわけですから雨が降ったら水かさが増えるし、雨が止んだら減少する。そういう川の変化はやはり自然さのひとつの表れではあります。さらに、そういう水の循環によつて、われわれの営みがあるし、いろんな動物とか

植物が生存している。これは、都市化がどんどん進んでいっても、都市における川の持つ意味として、またわれわれが川に求めるものとして、やはり大きな要素なんですね。

それから、都市という高密度な空間におけるオープンスペース。つまり、都市には、多くの高層ビルがあり、それが密集しているため、圧迫感を常に感じる高密度な空間なんですね。その中で、川というのは、上がありません。横もありませんから、そういう意味では、オープンスペースとしては、非常に貴重である。安らぎとか開放感とか、そういう心理的な効果として、川というのはあります。このオープンスペースということと関連して、

景観としての要素も川の存在と関わっています。

以上のように、都市の中の自然、オープンスペース、この二つが、だいたいインタビューしても、アンケートでも返ってきます。

河川文化の論点

題名が「河川文化の継承と発展」ということになっていきますけれども、大層なことを私が話すのも恥ずかしいのですが、今後、河川とのかかわり、川と水とのかかわりをより深めて、あるいは発展させていくためには、どういうことを考えなければならぬか。そういうことを整理しながら、河川文化の論点について話をさせていただきます。

〈河川文化と日本人の精神的特異性〉

最初に、河川文化と日本人の精神的特異性、これはどういうことかと言いますと、日本の文化、日本人というのはどういう民族かと言った場合、非常に興味深いことは、日本人のなかに、自然というものに対する郷愁性と言ったものがあるということですから、都市の中の川っていうときに、自然らしさということがありましたけれども、自然への郷愁性ということがあるんですね。以前、私の読んだ本の中でもおも

しろいと思つたのですが、自然を言語脳で聞く。つまりご存じのように、人間は右脳、左脳ありますよね。左の脳は論理的な、理性的な合理的な思考、右脳は情緒とか、感情とか、そういう役割と言われています。左の脳というのは、基本的には、いろんな論理的な処理をやる。特に言語脳と言ひまして、考えているときとか、話をしているときに活発に働いているんです。角田忠信という方の有名な本で、『日本人の脳』というのがあります。これは78年に出た本なんですけど、日本人の脳は特殊だということなんです。それは虫の音を、右脳で聞くか、左脳で聞くか調べたところ、驚いたことに、日本人は虫の音を左脳で聞くんですね。言語脳で聞く。つまり、虫の音をあたかも人の声であるかのごとく聞いているんです。これは、日本人だけだろうか、あるいはほかの外国の人もそうなのだろうか、ということ、いろんな実験をやったんですね。そうしたら、日本人だけなんです。だから、中国人とも違う。韓国人

とも違う。他のアジア人も違う。日本人だけなんです。唯一、同じような脳の構造を持っているのは、ポリネシアのどっかのある種族だけらしいです。要するに、日本人の脳というのは、特殊であるということが、脳の機能の研究ではつきり分かったわけです。

さらに虫の音から、自然音である波の音を聞かせると、やっぱり日本人は、言語脳で聞くんです。ということ、例えば、川のせせらぎとか、ああいう音も、日本人は人間の声のごとく言語脳で聞いているんですね。これが日本人の精神的特異性ということとあります。そういうことで、川も生き物みたいに感じる。そういう感性というのは、われわれにとってには実に自然なだけども、それは日本人が持っている特殊性なのです。欧米人とは違ってますね。だから、例えばいま流行している多自然型河川工法と言っても、彼らが考える多自然と、われわれ日本人が感じる多自然とは全然違う。これはもとをたど

ると、基本的に脳の機能が違うというふうにとらえられるということが面白いと。

〈河川文化と日本文化〉

次に、河川文化と日本文化ということですが、自然を敬い、自然と共生し、自然の循環に従った思想。これは日本人の生活の中に、自然というものが、非常に大きな位置を占めている。例えば、衣替えのよう季節に応じて着ているものを変える。四季の変化に応じて、われわれの生活は、変わっていきます。稲作だって、春の苗から、梅雨の田植え、そして秋の収穫と季節の変化に応じて対応していきます。そういう自然のリズムなり、秩序というのが、やっぱり日本の文化にとって大きな意味を持っていると言えるのではないだろうか。

日本人は無宗教と言われています。この日本人が無宗教ということについては、いろいろ言われるんですけれども、山本七平という人は、日本人は無宗

教だつていうけど、実は宗教があるんだ。それは日本教と言うんだと言ってます。それは自然を中核とする、自然を内心の規範とする宗教である。自然を完成した秩序と考えて、自然さを行動の規範とする。これは日本人だけなんですよね。これは、私たちにとつては当たり前なんですけど、例えば、あの人のもの言いは自然だ、あの人の物腰は自然だ、いいなと言う。その自然さというのをすごく良いと感じるその感性というのは、これは日本の文化特有みたいなんです。山本七平氏は『日本人の人生観』という本でこのようなことを言っているわけです。要するに、自然というものが、日本の文化を語る場合に、本質的なものなんです。

じゃあ、そういう自然を敬う宗教を基本的にもちながら、何で高度成長期に川を目茶目茶にして平気なのかということになるわけですね。これは矛盾するじゃないか。私もこのことについて、何でだろうといつも考えていたんですね。あれだけ自然を尊び、

自然と共生する日本人が、何で高度成長期に川をむごいほどに汚してしまったのか。そういうとき、土居健郎という人の書いた本に出会いました。この人は精神医学者ですけれども、『甘えの構造』という有名な本を出しています。土居氏は、日本人の環境破壊に関して、非常に興味あることが言っております。つまり、自然への甘えであると。日本人は自然に対して、あたかもそれが無限の包容力をもっているかのごとき、いわば母親に対するような感情を持っている。例えば、水に流すつて言うでしょ。何かいろんな不快なものも水に流しちゃえば、やがて自然が無化してくれるという、そういう無限の浄化能力みたいな、そういう感情つていうのが、日本人の中にあって、その甘えつていうのが、川になにを流しても、いくら汚しても何とかなるという一方的な思いにつながつていったんじゃないか。そういうことを書いてあるんですね。それで私もはたと思つて、そういうことと関係があるのかどうか分かりませんが

どね、何となく納得しちやったわけです。

それから日本人と自然との関係について、もうひとつ、堀田善衛の「インドで考えたこと」という本のなかで「自然との馴れ合い」という言葉があります。日本人は自然というと、恵みとか、いいイメージでとるんですけども、インドとか中近東とかあの辺に行きますと、自然というのは、過酷っていうか、避けたいというか、あまりにも強烈すぎるというわけで、日本人の感じる「恵みとしての自然」という考え方はないんですね。だから母としての自然、恵みとしての自然というイメージは、これも日本文化の特色だと思っんです。

〈河川文化と近代合理主義〉

三番目になりますけども、近代合理主義という問題があります。つまり、河川に機能を求める考え方は、川の機能として、治水機能、利水機能ということが言われます。治水機能を徹底させようと思っ

たら、三面張の河道になっちゃうわけですね。そこで親水ということですが、さっきお話ししましたけれども、80年代に親水という概念が出たときに、親水機能というふうに考えた。つまり、親水機能を果たすためには、護岸をどうしたらいいか、水辺をどう整備したらいいかとなったわけです。これは、それまでの治水機能、利水機能と同じなんです。機能というのは、人間が勝手に考えることで、川には本来機能なんてないわけです。そういう近代合理主義というのは、やはり水とのかかわりにおいて、われわれも克服しなきゃいけない、止めなきゃいけない、そのように思います。

〈河川文化と生き、暮らし、働く人間の余暇〉

それから次に、河川文化と生き、暮らし、働く人間ということがあります。やはりこれから河川文化を考え、あるいは河川と生活のかかわりを考える場合の大事なことです。が、われわれの生活、そして生

きるということはどういうことか、そういうことを考えなきゃいけないですね。生きる、暮らす、働くと言いますが、これは内橋克人という経済評論家が最近よく言っていることです。生きるというのは、個人の人生としての生き方です。暮らすというのは、個人だけじゃなくて、例えば家族とか、隣人とか、周りの人と一緒に生きるというイメージがある。働くというのは、何かをして社会に貢献して、社会とのそういうつながりですね。今まで、この三つがばらばらだった。それが、戦後の高度成長からバブルまでの生活の実態だったと思うんですけども、バブルが崩壊して、もう一度生活を見直そうというときに、内橋克人さんは、やはりこれからは、生きるということと暮らすということ、そして働くということをとータルに考えなくてはいけないと言っているわけです。そこで、このことと関連して河川文化を考えると、余暇ですね、余暇。つまり自由な時間をどう使うか。ここにひとつの重要なポイント

があるように思えます。特に、暮らしという領域ですね。余暇に身近な自然をあらためて見直し、また隣人とか周りの人たちと一緒にになにかやってみる。

日本人は余暇があると、アウトドアのレジャーとかキャンプに行ったり、温泉に行ったり、おいしいものを食べるとか、いろいろありますけども、余暇をどう使うかということが、やはりこれからの川とのかかわりを考えるとき大事なことです。それが余暇の問題と余暇の過ごし方、それとゆとり、精神的な豊かさ。こういうことが重要であります。

それから、高齢化社会と老後の過ごし方。平均寿命が延びてます。一応リタイアしても、10年以上あるわけですね。それをどのように過ごすかといったとき、その老後の過ごし方は大きな問題なんです。そんな中で、例えば、川づくりとか、そういうことに自分の自由な時間を使っていく。そういうことも有意義な過ごし方のひとつではないかと思えます。

川と水に関する活動団体のデータを見ますと、70歳

か80歳とかの高齢の方というのが、活動の中で結構頑張っているんじゃないですかね。川づくりの運動というのは、だいたい40代、50代から、70代、80代、それぐらいの層がほとんど中心なんです。それはやはり余暇の問題と関係があると思います。

〈河川文化とコミュニティ〉

それから、コミュニティの問題があります。まちづくりと川づくり。川づくりという言葉は、近年使われてきたわけですが、まちづくりの方がもっと古いですね。住民参加のまちづくりというのは、かなり前からあります。まちづくりと川づくりとどう違うかといいますと、まちづくりはかなり住民主体で民主的に進めていけるのに対して、やはり川づくりの場合は、水害の問題とか、そういう問題が入ってくるんですね。だからどうしても、そこに行政の役割、治水の問題とかが入らざるを得ないというところで、ちよつと違うんですね。だからパートナーシ

ップというのは川づくりにおいてびったりという感じがします。

それから、これは少し古い言葉で、70年代の学生ときに流行ったレーニンの言葉ですけど、「自然発生性から目的意識性へ」というのがあります。こういう川づくりの運動というのは、あそこがやるからうちもやらなきゃいけないとか、そういうものじゃなくて、何か自然発生的なものが必要なんです。そういうものがないと、絶対うまくいかないですね。ただ、それだけじゃ駄目で、そういうものをうまく、ほかの団体とのネットワークをつくるとか、いろんな形で目的意識なものに変えていかないとけない。そういうことがあります。

〈河川文化と世代論〉

それから最後に世代論の問題があります。『河川文化』という雑誌で、いろんな会員の声というのを読みますと、ほとんどそうですが、40代、50代、60

代の人は、昔の川は良かった。昔は近くの川で遊んだとか、そういう思い出が続くんです。つまりノスタルジックな、そういうような思い出が続くんです。同時に川づくりの中心年齢層を調べてみますと、30代から80代、40代から80代、それから、50代から80代。この辺に集中しています。だから、どっちかという、高齡か中高年以上の人が中心なんですね。なぜかという、彼らは、昔の自分が小さいころの良き環境というものを記憶として持っているわけですね。だから、今の川を見て、何とかしなきゃいけないという、そういう思いがあって、そういう活動をやってるわけです。

それで、その活動内容を見ますと、だいたい環境保全とか、清掃ですね、缶を拾うとか。あと生態系調査とか、川の学習とか、そういうのが多いです。川をきれいにして、川の歴史を知るとか、そういうふうなことが、川づくり活動の中心になっているところと、いうところです。

戻りますけども、つまり河川環境の激変を経験を

している中高年層というのが、いわば現在の川づくりの中核なんですけども、やはり継承ということを考えますと、下の世代にどうやってそういうものを伝えていくかというのが重要になります。環境教育の必要性が言われてます。環境教育、確かにいろんな川の自然を学ぶ機会をもつことはいいんですけども、やはり長期的には、川の環境を世代を越えて持続的に保っていく、そういう方向性を持たないといけないんじゃないかと思えます。それによって、世代間の川に対する思いの落差みたいなものを埋めながら、ともに川づくりをやっていくことが何よりの環境教育になっていくのではないかと思えます。

以上、河川文化の継承と発展のために考えなければならぬ論点として六つあげましたが、これらのことが、やはり、川と人とのかわり、水と人とのかわりを考えていく場合、重要になってくるんじゃないかと思えます。だいたい時間たちました。以上で話を終わらせていただきます。(拍手)

(平成二二年二月一日)